

官人としての陳子昂

——その上書を中心として

はじめに

調露二年（八月に永隆元年と改元、西暦六八〇年）、洛陽での貢試に落第した二十二歳の陳子昂は、「落第西還別劉祭酒・高明府」「落第西還別魏四懷」の二詩を残し、長安を經由して蜀に帰った。この二詩は唐代「落第詩」の嚆矢とも言えるものであるが、後者は「還因北山逕、帰守東陂田」という表現で締めくくられる。帰隱の心情の表明であるが、「東陂の田を守る」は、周燮の故事を踏まえる。『後漢書』本伝によると、周燮は先祖譲りの草廬に住んで自給自足の生活をし、孝廉・賢良方正に挙げられても固辞するのみだった。安帝の招聘を受けたとき、族人が「德行を修めるのは国を為めるためなのに、君はなぜ東岡の陂田を守るのみなのか」と問うと、彼は「夫れ道を修むる者は、其の時を度りて動く。動きて時ならざれば、焉んぞ亨るを得

高木重俊

んや」と答えたという。「東陂の田を守らん」と述べる陳子昂の句には、時機を待つて動こうとする意志が込められているのである。やがて武則天の朝に出仕した陳子昂は、好機到来とばかりに情熱をたぎらせ、彼の理想とする政治の実現のために積極的に発言をするのであるが、結果として挫折と失意に打ちひしがれることになる。最晩年の聖曆二年（六九九）、郷里の射洪県に帰隱した彼は、旧知の侍御史冀珪と太子司議郎崔泰之の訪問を受け、「余一隅に独坐し、孤り五蠹を憤る。身は江海に在りと雖も、心は魏闕に馳す」（喜遇冀侍御珪・崔司議泰之二使詩序）と、その心境を述べた。官界に絶望し、江海（民間）に身を委ねた晩年においても、魏闕（朝廷、ひいては現実政治）への関心はいささかも衰えてはいないのである。

現実政治への関心は、陳子昂の生涯にわたって保持された。魏闕と江海の間、つまり、公人と私人の間を、彼の意

識は揺れ続け、両者を繋ぐものは「孤憤」だったと言つてよい。本稿では、魏闕への思いの吐露である彼の政治的意見書を中心に、官人としての陳子昂の像を描いてみようとするものである。

一

羅時進氏は「陳子昂研究の中いくつかの基本問題についての再認識」と題する論稿で、「総じて言えば、唐人の見たところ、陳子昂の文学の功績は主として文章に在って詩歌ではない。彼はまず一人の傑出した文章家であり、その後一人の詩人だった」と述べておられる。¹⁾これは妥当な見解である。そして、文章家陳子昂の文章の中心は、その政治的意見書であることもまた、贅言を要すまい。

彼の文章で『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』等の史書に採録されるものは、以下の通りである。制作年代順に掲出してみよう。また、その文章の規模を知るために、『全唐文』における字数、史書に引用された字数を併せて記す。文章の標題は『全唐文』による。

- ① 「諫靈駕入京書」(一五四八字、六八四年の作)
『旧唐書』『陳子昂伝』(一四二八字)
『新唐書』『陳子昂伝』(三九六字)
- ② 「諫政理書」(二二六四字、六八四年)
『新唐書』『陳子昂伝』(七六九字)
- ③ 「上軍国利害事三条」(二二一三字、六八五年)
『新唐書』『陳子昂伝』(五八六字)
『資治通鑑』『唐紀・垂拱元年』(二二二字)
- ④ 「上西蕃辺州安危事三条」(一九〇〇字、六八六年)
『新唐書』『陳子昂伝』(六六二字)
『諫雅州討生羌書』(一一八三字、六八七年)
『旧唐書』『陳子昂伝』(一一五六字)
『新唐書』『陳子昂伝』(一六〇五字)
- ⑤ 「資治通鑑』『唐紀・垂拱四年』(三五一字)
『諫用刑書』(一七四八字、六八八年)
『旧唐書』『刑法志』(一五八五字)
『資治通鑑』『唐紀・垂拱二年』(四三二三字)
- ⑥ 「答制問事八条」(二八四二字、六八九年)
『新唐書』『陳子昂伝』(七六四字)
『資治通鑑』『唐紀・永昌元年』(一九九字)
『諫刑書』(一一〇六字、六八九年)
『資治通鑑』『唐紀・永昌元年』(二五一字)
- ⑦ 「上軍国機要事」(一六三四字、六九六年)
『資治通鑑』『唐紀・万歳通天元年』(九八八字)

⑩「復讎議状」(五四五字、六九八年)

『旧唐書』「陳子昂伝」(二二五字)

『新唐書』「孝友伝」(二八一字)

これらの文章はすべて政治に関する意見書である。唐代の文人で、政治の上書がこれほど多く史書に取り上げられた者は稀有である。歴史家の眼から見て、陳子昂の上書がいかに価値を持つものであるかを示していると言えよう。

しかも、⑩を除く九篇は、いずれも千字から三千字に垂んとする長文で、作者の筆力を十分に証明する。ただ、余りに長文であるために、①⑤⑥がほぼ全文にわたって史書に収載されるのみで、他は、例えば⑦を収める『新唐書』に「其の大権に謂へらく」、「資治通鑑」に「辞は婉に意は切に、其の論は甚だ美なり、凡そ三千言」とコメントされるように、ほとんど抄録であったり内容紹介のみであったりするのやむを得ない。このことが陳子昂の上書の価値を減じるものではさらさらないのである。

史書に引用された右の文章のほかに、彼には、

「為喬補闕突厥表」(二〇八四字、六八六年)

「諫曹仁師出軍書」(四八一一字、六八八年)

「上益国事」(三三七字、六八九年)

「上蜀川軍事」(五二二字、六八九年)

「申宗人冤獄書」(二二〇〇字、制作年未詳)

などの、政治・政策に関する意見書が残っている。陳子昂は、現実政治に対して極めて強い関心を有する文人であった。

彼の政治的意見は、「安人(人を安んじる)」という観点を基盤として発せられる⁽²⁾。彼の名が初めて官界に記憶されることになった①「諫靈駕入京書」は、洛陽で崩じた高宗の柩を長安に移葬するべきではないと主張するもので、当時の長安が荒饑のために赤地と化して青草もなく、人民は転徙・流離し、田野は燕^あれ、白骨縦横たるありさまだから、靈駕を奉じた千乗万騎を受け入れる余裕もなく、さらに山陵造営のために「疲弊の衆を率^ひめ、数万の兵を興し、近畿に徵発し、羸老を鞭朴し、山を鑿ち石を採り、駆りて以て功を就^なさんと欲」すれば、「恐らくは春作に時なく、秋成は望みを絶ち、凋^し瘵^い遺^い嗥^う(病み衰えた生き残りの民)は、再び飢苦に罹^からん」と訴える。唐の高祖は献陵に、太宗は昭陵に葬られている。ともに長安の北方である。第三代の高宗を前の二代と異なって洛陽に葬れという意見はそれだけでも大胆であるのに、彼は長安帛葬反対の第一の根拠を三輔(長安一帯)の疲民の救済という「安人」の理念に置くのであり、陳子昂の諫臣としての自負と資質がこの最初の上

書に明瞭に示されるのである。

②「諫政理書」では、「元氣を調」える方途を問う武則天に対し、「元氣は天地の始め、万物の祖、王政の大端なり、……、王政の貴は、人を安んずるより大なるは莫し」と前置きし、人が「その俗に安んじ、その業を楽しみ、その服を美とするを得ば、陰陽大いに和し、元氣以て正し」と続ける。そして、明堂を建てて政教を布き、太学を再建して天下の英賢を育成せよと勧める。③「上軍国利害事」は「出使」「牧宰」「人機」の三点から意見を述べる。天下を巡行視察する大使にはその任に相応しい賢者を選任すべきなのに、現今の使者は朝廷を出発する前から、市井の人にその任にあらずと思われている（「出使」）、宰相はほほ人を得たり令は皇帝の腹心手足であり、現在、宰相はほほ人を得たり言えるが、天下万民の身近な存在である刺史・県令の選補は吏部が安易に行なっている（「牧宰」という状況を指摘したのち、「人機」において、「夫百姓安則樂其生、不安則輕其死、輕其死則無所不至也。故曰、人不可使窮、窮之則姦宄生。人不可數動、動之則災變起。姦宄不息、災變日興、叛逆乘機、天下亂矣」と、人民を困窮させ動揺させると、天下の危機が生じると述べる。反復的語法と、因果関係を示す「則」とを多用する陳子昂の説得の調子は強い。彼は

その語調に載せて「安人」の理念を説くのである。

⑦は「当今の政要」を求める武則天の制問に答えたもので、彼は「国の興廢は人に在り」ということを前提に、当面の政局に対して「請措刑・重任賢・得賢・賢不可疑・招諫・勸賞・請息兵・安宗子」の八つの観点から意見を述べる。「請措刑」は⑥「諫用刑書」・⑧「諫刑書」に通じ、「息兵」は④「上西蕃辺州安危事」・「為喬補闕論突厥表」・⑤「諫雅州討生羌書」・「諫曹仁師出軍書」などの辺境への出兵をめぐる一連の意見書に通じ、「重任賢・得賢・賢不可疑」は③「上軍国利害事」などの賢人の任用を説く意見書につながる。これに、唐の宗室の誅殺をやめて宗人に安心を与えよという「安宗子」を加えて、この「答制問事八条」には、政治に対する陳子昂の提言のほほすべてが凝縮されているのである。

陳子昂の政治的発言が、民生の安定の上こそ政権の安定があるとする儒教の理念に基づくものであることは、改めて言うまでもない。ただ、儒教理念を前面に押し出す議論は、往々にして論調が生硬で観念的になりやすい。加えて上疏文の常套たる歴史故事の羅列は、それがいかに説得のための必要があろうとも、度が過ぎれば退屈である。陳子昂の文章もそうした傾向を持つものであったことは否め

ない。「答制問事八条」は、武則天に奉られた上書としては第八番目あたりのものであるが、武則天が「上古の事を引用せず、観念論にならずに具体的に」という条件を付けて制問に答えさせようとしたのも、陳子昂の文章のそうした傾向と、長文をも辞さない饒舌性を示しているのである。

とは言うものの、陳子昂の上書の文章は強い気迫に溢れている。深い歴史認識、蜀の「草莽」の民として眺めた政治の現実、二次にわたる塞外遠征の辛苦の体験を基盤に、彼は現実政治の過誤を諫め、あるべき具体策を提示する。その具体策は、例えば、劍南の松州・潘州に駐屯する通軌軍に対して人夫を徵発して食糧を搬送するのをやめ、九等の税錢を課して騾馬を購入し、州県の富戸に運賃を払って運ばせれば、通常運送経費が二十分の一以上に減る（「上蜀川軍事」）、劍南諸山の銅鉱を再開発して益州府で銅錢を鑄造し、松・潘の諸軍の用度に充て、剰余金が出たら湖南の諸州の米を買って洛陽の太倉に運ぶべきだ（「上益圍事」）などを始めとして、随所に見られる。理念と具体策とが均衡のとれた形で、彼の上書には表われるのである。

彼の現実批判の筆鋒は激越である。例えば前述した「上軍國利害事」の「牧宰」の条には、

竊見吏部選人、補一縣令如補一縣尉爾。但以資次第・從官遊歷即補之、不論賢良德行可以化人而拔擢見用者。縱吏部侍郎時有知此弊而欲超越用人、則天下小人已黨然相謗矣。所以然者、習於常而有驚怪也。所以天下庸流、莫不能得爲縣令。庸流一雜、賢不肖莫分。但以爲縣令庸流、資次爲選、不以才能任職。所以天下凌遲、百姓無由知陛下聖德勤勞夙夜之念、但以愁怨、以爲天子之令違如此也。自有國來、此弊最深、而未能除也。豈不甚哉。

という一節があり、吏部の選人が資次（官階）や官歴に基づいて行なわれ、賢良・德行・才能の士が任官されず、凡庸な者が県令に任じられる現実を告発する。現実に対する彼の怒りはストレートな文体に載せられ、四六のリズムを基調とする上疏文の文体の粹をはみ出してしまっている。論旨の明快さと力強さが、彼の上疏文の特長なのである。

陳子昂の筆鋒は、常識的禁忌を憚らないように見える。

頃年以來、伏見諸方告密、囚累百千輩。……及其窮究、百無一實。……或謂陛下愛一人而害百人。天下喁喁、莫知寧所。（「諫用刑書」）

は、武則天が開いた「告密」の制によって逮捕され取り

調べられる囚人のうち、真の罪に該当する者は百人に一人もないと言うものである。また、次は陳子昂の宗人（同姓）たる陳嘉言が「詔獄」に囚われているのを救おうとするものであるが、彼は陳嘉言の状況を、

今乃遭誣罔之罪、被搆架之詞。陷見疑之辜、困無驗之告、幽窮詔獄、吏不見明、肝血赤心、無所控告。

（「申宗人冤獄書」）

と述べる。武則天が設置した詔獄（制獄）に拘われの陳嘉言が「誣罔」の罪で「搆架」の論告を受けているというのは、たとえそれが真実であっても、相当の勇気が要ることである。陳子昂の発言態度は、諫臣そのものと言えよう。彼は、「臣聞く、古人言へらく、国の忠臣たる者は半ば死し、国の諫臣たる者は必ず死すと。然れども至忠の臣は、死を避けずして以て主を諫む」（「申宗人冤獄書」）、「臣聞く、忠臣は君に事へて、死有りて二無し、佞を懐きて諫めざるは、罪これより大なること莫し」（「諫用刑書」）、「今朝廷の百僚、疑ふ者有りと雖も、敢てこれを言ふ無し、……心に以て非と為すことは、安んぞ言はざるべけんや」（「諫曹仁師出軍書」）とも言う。自ら諫臣たらんとする宣言である。

彼は「答制問事八条」の「招諫」の条で、「臣伏して見

るに、太宗文武聖皇帝、徳は三王に冠たりて、名の五帝より高きは、実に能く魏徴の愚直を容るるに由る」と述べているが、おそらく彼には、自己を貞観の諫諍の臣になぞらえる意識があったであろう。太宗と、魏徴・房玄齡・杜如晦・褚遂良ら群臣との政治に関する議論は、のちに吳兢の手で『貞観政要』十巻にまとめられる。該書の成立は開元八年（七二〇）ごろとされるが、陳子昂の生きた時代はそれより貞観に近いわけだから、太宗と群臣の忌憚のない議論は、より生き生きと巷間に流布していたであろう。陳子昂が願ったのも、まさにそうした君臣関係だったのである。

さらに言うならば、「当今の政要」を求める武則天の制問に答えるにあたり、陳子昂の念頭をよぎったのは貞観の馬周の故事だったであろう。『旧唐書』『馬周伝』によると、貞観三年（六二九）に太宗が百僚に政治の得失を上書させたおり、馬周は中將郎常何のために「便宜二十余事」を書き、それが太宗の旨にかなって拔擢を受けた。馬周はその後もしばしば上疏して意見を述べ、太宗に嘉納された。陳子昂が八事にわたって武則天に答えるに当たり、彼は自分を馬周と重ね合わせていたに相違ない。それは武氏王朝に立って栄達の途を歩む自己の未来像でもあったのである。

武則天が唐の宗室やそれに連なる旧勢力の力をそぎ、自前の政権を確立するに至る潮流の中で、彼女に対して直諫したのは、もとより陳子昂だけではない。当該時代に関する『資治通鑑』の記述から、そうした動きを拾ってみよう。その意見が上奏文等の形で『全唐文』に収められているものは、その標題と収録する巻数を括弧内に記しておいた。

光宅元年（六八四）に武則天を讃える符瑞を「諂詐」であると上奏した尚書左丞馮元常、宗室の誅殺に反対した内史裴炎、その弟の子の太僕寺丞裴仙先、垂拱二年（六八六）九月、新豊県に新山が隆起し群臣がそれを慶賀したとき、「陛下は女主として陽位にいるために地気が塞隔したのである」と上書した江陵の翁文俊（『上則天書』二三三、同三年に「政治を皇帝に返すべし」と述べた宰相劉禕之、同四年の越王貞ら宗室の大弾圧が行なわれたとき、「連坐した者はみな註誤による」と密奏して減刑を求めた豫州刺史狄仁傑（『奏從越王拳兵註誤免死表』一六九）、完成した明堂を古制にあらずと批判した侍御史王求礼、天授二年（六九〇）に酷吏の専横を諫めた御史中丞李嗣真（『上諫米俊臣構陷無罪

書』一六四）、長寿元年（六九二）に濫官を戒めて選挙の法を上疏した補闕薛登（『論選挙疏』二八二）、用刑を諫めた万年県主簿徐堅（『論刑獄表』二七二）、酷吏の横虐を批判した鳳閣侍郎李昭徳、告密・羅織を断つべしと上疏した右補闕朱敬則（『請除濫刑疏』一七〇）、および侍御史周矩（『諫制獄酷刑疏』二六〇）、天册万歳元年（六九五）の明堂火災に際し直言を求めた武則天に対し、忌憚のない意見を述べた左拾遺劉承慶（『明堂災後求直言疏』二〇三）・左史張鼎・獲嘉県主簿劉知幾。

こうして見ると、武則天の施政を諫めた人々は、宰相から県主簿に至るまで、幅広く存在したことがわかる。この他、『資治通鑑』に取り上げられていないもので、

狄仁傑「請罷百姓西戍疏勒等四鎮疏」「諫造大像疏」
（『全唐文』一六九）

韋承慶「明堂災後求直言疏」（一八八）

李昭徳「請建皇嗣疏」（二〇八）

魏靖「理冤濫疏」（二〇八）

崔融「諫稅闕市疏」（二一九）

韋嗣立「諫濫官疏」「省刑罰疏」（二三六）

蘇安恒「請復位皇太子疏」「同第二疏」「理魏元忠疏」

（二三七）

盧藏用「諫營興泰宮疏」(二三八)

李 嶠「論巡察風俗疏」「諫建白馬坂大像疏」(二四七)

張廷珪「諫白馬坂宮大像表」(二六九)

なども、武則天の施政の顯著な傾向である宗室の弾圧・濫官・濫刑・辺境への出兵などに関して上呈された意見書
の一端である。

告密・羅織の陥穽が大きく口を開けていた時代、しかも、『資治通鑑』天授元年(六九〇)四月の条には「朝士人々自ら危ぶみ、相見るも敢て言を交ふるものなく、道路 目を以てす」とまで記されたこの閉塞の状況にもかかわらず、硬骨の言論は鳴りをひそめたわけではなく、むしろ時代の危機感を反映して燃えさかったと言つてよい。

ただ、この状況は、武則天が意図した結果でもあった。彼女は告密を推奨する一方で、垂拱二年(六八七)三月に銅甌(銅製の目安箱)を設け、仕進を求める者は延恩甌に、政治の得失を言う者は招諫甌に、冤抑ある者は伸冤甌に、天象・軍機の秘計を言う者は通玄甌に表疏を投じさせた。「大いに人望を収めんと欲」した(『旧唐書』「刑法志」)のである。陳子昂の「諫刑書」は招諫甌に投じられた。

武則天は、政權確立に向けての自己の意図の達成状況と世論の状況とを勘案して表疏の内容に対応した。例えば、

皇太子の復辟を求める蘇安恒「請復位皇太子疏」や、大いに賢人を登用せよと求める韋承慶「明堂災後求直諫疏」は、ともに「書聞して報じられず」(『新唐書』各本伝)、周矩の「諫制獄酷刑疏」は「武后 納れず」(『新唐書』刑法志)、李嗣真の「上諫來俊臣構陷無罪書」は「疏奏して納れられず」(『旧唐書』本伝)というあしらいを受けたのに、武承嗣を皇嗣に立てるのを諫める李昭徳「請建皇嗣疏」に対しては「則天これを瘡り、乃ち止む」(『旧唐書』本伝)、長寿中に奏上された朱敬則「請除濫刑疏」については「則天 甚だこれを善しとす」(『旧唐書』本伝)のように評価し、張廷珪「諫白馬坂宮大像表」には、「則天その言に従ひ、即ち所作を停め、仍つて長生殿に於て召見し、深くこれを賞慰す」(『旧唐書』本伝)のように、引見して褒賞さえ与えているのである。

告密・羅織の恐怖と、たとえかりそめにしても発言の自由とがないまぜになったこの時代に、陳子昂の上書も生まれた。しかしながら、嗣聖元年(六八四)から永昌元年(六八九)に至る五年にわたって、十篇を超える上書を奉り、国政全般に関して倦むことなく問題点を指摘し続けた人物は他にいない。彼の上書には執念にも似た思いがほとばしる。初唐の時期、鋭い現実認識をもとに発言を続けた、彼

は唯一の文人なのである。

三

政治に対して飽くなき発言を続ける陳子昂の行為は、他の人々の支持を背景にするものだったのだろうか。『新唐書』本伝に「朋友に篤し」と記されるように、陳子昂は交友を重んじた。彼には多くの私的な交友関係がある。以下、資料別に整理してみよう。

- (1) 『新唐書』「陸余慶伝」に記される、いわゆる「方外の十友」は、陸余慶・趙貞固・盧藏用・陳子昂・杜審言・宋之間・畢構・郭襲微・司馬承禎・積懷一の十名。『旧唐書』「陸余慶伝」には、余慶は若いころに、知名の士であった陳子昂・宋之間・盧藏用・司馬承禎・法成らと交遊したと記される。
- (2) 盧藏用の「陳氏別伝」には、「(子昂)尤^{とよか}け交友の分を重んじ、意気一たび合すれば、白刃と雖も奪ふべからず」という「歳寒の友」として、陳子昂・陸余慶・趙貞固・盧藏用・畢構・郭襲微・懷一・王無競・房融・崔泰之の十名が記される。
- (3) 陳子昂の「昭夷子趙氏碑」は趙貞固(諱は元亮)の没後の作で、趙貞固の故人として、積法成・司馬子微

(諱は承禎)・盧藏用・魏元忠・陸余慶・孟詵・王適・宋之間・崔據を挙げる。筆者陳子昂も含まれる。

- (4) 陳子昂の「贈別冀侍御・崔司議詩序」に登場するのは、冀珪・崔泰之・房融・陸余慶・畢構。

- (5) 陳子昂「喜馬參軍相遇醉歌序」には、馬扱・畢構・陸余慶・崔泰之・鮮于晋・崔湏・懷一・王無競。

- (6) 陳子昂「晦日宴高氏林亭」「晦日重宴高氏林亭」詩は、調露二年(六八〇)正月晦日に高正臣の林亭における詩宴の作。高正臣・韓仲宣・弓嗣初・高瑾・陳子昂・陳嘉言・高嶠・周思鈞ら二十一人が集まり、「晦日宴高氏林亭序」は陳子昂の筆に成る。

- (7) 張説「孔補闕集序」は、孔季翊(季詔とも。字は季和)なる人物の文集の序であるが、孔季和が永昌初(六八九)に制科を得て校書郎を授けられ書坊(秘書省の書室)に出入りしていたとき、陳子昂・魏知古・許望・杜澄・谷倚・馬懷素・王無競・元希声・李伯魚・桓元範らが、彼の風格の清遠さ、玄談の深さを西晋末の衛玠になぞらえたという。永昌元年秋に右衛門曹參軍に移るまで陳子昂は麟台正字の任にあったから、このグループは秘書省勤めの中で形成されたと思われるが、その実態はよくわからない。

陳子昂はこのようにいくつかのグループの中で数多くの友人と交遊していた。初唐の文人で、これほどに集団的交遊が確認される者はいない。ただ、これら数多くの友人の中で最も親しい者はと言えば、『新唐書』本伝に記される陸余慶・王無競・房融・崔泰之・盧藏用・趙元（趙貞固のこと）の六名ということになる。彼らに陳子昂を加えた七名が中核となり、交友の輪が広がって行ったのである。

本稿ではこれらグループの性格について立ち入って議論することはしないが、構成メンバーには科試に合格した者が多く、下級官僚に任じられたばかりの者、さらには、道士・僧侶や処士までが含まれるなど、多彩であった。「薛大夫山亭宴序」で陳子昂が「夫れ貧賤の交りは忘るべからず」と言うように、彼らの集団は、世に出る前の人、あるいは官界における今後の人生に確たる展望を持ち得ない人などが、かばい合うようにして身を寄せたものであった。

ところで、陳子昂を取り巻く友人としてこれだけの数が挙げられたにもかかわらず、官人として時政の根幹に触れる発言を残している者は、さして多くない。例えば、

桓彦範「論時政表」「請窮治張昌宗疏」（全唐文一七五）

魏元忠「上高宗封事」（一七六）

魏知古「諫造金仙玉真觀疏」「又諫營道觀疏」（二三七）

盧藏用「諫營興泰宮疏」（二三八）

が挙げられる程度である。ただ、魏元忠のものは高宗に、魏知古のものは復辟後の中宗か睿宗に奉られたものであり、かつ、盧藏用を除く桓彦範・魏元忠・魏知古の三人は、陳子昂とはどの程度の関係があったのかも判然としない。こうした状況から見ると、陳子昂の親友には「頗る氣を負ひて豪縦なり、下筆成章科に擢んでらる」（『新唐書』「王無競伝」）、「少くして志略を負ひ、論弁を好む」（『新唐書』「趙元伝」）というような、陳子昂と性格的に通う所のある人々がいたにもかかわらず、彼らは、例えば中唐の元稹と白居易のように心を通わせて政治の現実に立ち向かうという行動をとっていないのである。倦むことなく政治に対して発言する陳子昂の行為は、彼を取り巻く人々とはほとんど関わりのない、孤立したものであり、全く陳子昂の個人的事情と資質に根ざすものであった。

四

唐から周へと移行する時代の流れの中で、政権に対する陳子昂の思いはどのように変化したのか。その思いは、彼の作品の形態によってさまざまな表われ方をしますが、こ

では散文を中心に追ってみる。

高宗の崩御直後に中宗に上呈した「諫靈駕入京書」には、
太平之主、將復在於今日矣。況皇太后又以文母之賢、
協軒宮之耀、軍國大事、遺詔決之。……、陛下何不覽諫
臣之策、採行路之謠、諮謀太后、平章宰輔。

という表現がある。国家の大事は太后（武則天）や宰相に
相談して決定されよと言うのである。武則天は高宗の在世
中から二聖と称せられ、また、高宗の遺詔に「軍國の大事
に決せざる者あれば、天后の処分を取れ」（『旧唐書』「高宗
紀」とあった。陳子昂は武則天の存在の重さを十分に承知
しているのである。

続く「諫政理書」は、「伏して惟たゞふに、皇太后陛下、少
く察を加へられよ」とあるように、この上書は中宗ではな
く武則天に奉られている。この文章では、

願陛下爲大唐建萬代之策、恢三聖之功、傳乎子孫、永
作鴻業。……、思願陛下念先帝之休意、恢大唐之鴻業。

……、是以臣願陛下爲大唐建萬代之策者、意在茲乎。
と述べられる。彼は武則天に対して、「大唐」のために
万代の策を建てるよう要請しているのである。唐王朝の未
来を確立できるのは武則天だという認識が、陳子昂には強
くあったであろう。彼は眼前に武則天がおわすが如く、情

熱をこめて語りかけるのである。

陳子昂の二つの上書を見た武則天は、彼を金華殿に引見
し、応対を奇として麟台正字に拜した。「梓州射洪県の草
莽の愚臣陳子昂」（『諫政理書』）は、二度にわたる闕下への
上書により武則天の引見を被り、任官された。この身ぶる
いするほどの栄誉が、陳子昂に官人としての強烈な自負と
使命感を生じさせ、彼はこの後次々と意見書を奉って行
く。その意見書は厳しい現実批判の言辞を伴っている
が、内容は望ましい現実の建設に対する具体的提言であ
る。彼は、緩み始めた大唐の籬かきを締め直し、貞觀の盛世を
再来させようとする。武則天ならばそれが可能であろう
し、そうなるこそ自己の栄達栄達が遂げられる。彼にはこん
な思い入れがあったとと考えてよい。

盧藏用の「陳氏別伝」では、武則天が陳子昂を引見した
際的狀況について、

（武則天）覽其書而壯之、召見問狀。子昂貌寢寡援。然
言王霸大略・君臣之際、甚慷慨焉。上壯其言而未深知也。
乃勅曰、梓州人陳子昂、地籍英靈、文稱偉曄、拜麟臺正
字。時洛中傳寫其書、市肆閭巷、吟諷相屬、乃至轉相貨
鬻、飛馳遠邇。

のように記している。容貌が寝みく後援者もない陳子昂

は、武則天の眼前で王霸の大略や君臣の際会について、慎り嘆きつつ語ったというのである。「王霸の大略」とは、『新唐書』「陳子昂伝・論贊」に言う「王者之術」のこと。「君臣之際」は君臣の際会であるが、陳子昂は理想の君臣關係を、戦国時代の燕の昭王と樂毅のような、「感激」によって結ばれるものと見ている。⁽⁶⁾身震いするほどの出会いによって結ばれる君臣のつながり、彼はそれを武則天に期待するのである。しかし則天はその言を壮であるとしたものの「深く知る」までには至らなかった。何を「深知」するかと言えば、それは陳子昂の官吏としての能力であろう。それがよくわからなかったので、武則天は「梓州の人陳子昂、地は英靈に籍り、文は偉曄に称ふ」と述べた。これは左思「蜀都賦」に「近くは則ち江漢炳靈にして、世々その英を載す」「王褒は韓曄として秀発し、揚雄は章を含みて挺生す」とあるのをもじったもので、陳子昂は出身地である蜀の威靈を受け、蜀の文学の伝統にかなっていると述べるに過ぎない。武則天は陳子昂の意見を「嘉納」したというわけではないのである。

ただ、注目すべきは、陳子昂の上書（「諫靈駕入京書」か「諫政理書」、あるいはその双方）が、当時の人々に広く知れ渡ったということである。洛陽の市民はその書を伝えて

書写し、市場や村里でも相ついで口ずさみ、さらに売買されて、遠近にあつという間に行きわたったという証言は、古くは左思の「三都賦」、近くは絶唱と称された駱賓王の「帝京篇」、さらには後世の白居易の詩の流行を思わせるものであるが、陳子昂の場合、それは文学作品ではなく、政治的意見書である。その内容が同時代人の琴線に触れ、文体が「吟諷」できるものでない限り、このような大流行は不可能であろう。ともあれ、陳子昂はこの時点で文章家としての声価を確かなものとした。嗣聖・文明・光宅と目まぐるしく年号が変わった六八四年、彼の二十六歳の時である。

しかしながら、武則天が陳子昂を「未深知」であったことと、陳子昂の文名が挙がったことの径庭は大きなものであり、大多数の文人の宿命である「懷才不遇」の嘆きへのスタートが、ここに切られたとも言えるのである。

この後、陳子昂は「秩滿ちて常牒に随つて右衛曹曹に補せらる。上 数しば召して政治を問ふも、言は多く切直にして、書奏しては輒ちこれを罷む」（「陳氏別伝」）という状態となった。秘書正字から右衛曹曹参軍への昇進は任期満了後の定期移動、加えて彼の上書は捨て置かれるという、いわば停滞の状況に陥ったのである。その時に歴史の歯車

はまたひとつ回転し、武則天が皇帝の位に即き、国号を周と改めた。天授元年（六九〇）九月である。

陳子昂はただちに「大周受命頌」を上呈し、武則天を古の女皇女希氏（女媧）になぞらえてその盛徳を讃えている。三皇の一人である女媧への比定は、「牝鷄晨鳴」の誹謗への回答であろう。「上大周受命頌序」では、都人や群臣がこぞって目撃したという瑞兆——鳳鳥が南から飛来して数千羽の鳥に迎えられ、数百の赤雀が東から飛来して宮中を飛び回り、その後を黄雀が従って飛び、慶雲・休光が出現した——を克明に記録し、「鳳は陽鳥である。赤雀は火の精、それに従う黄雀は土の精である。土は火の子に当たり、子が母に随うというのは、母の姓を纂ぐことである」のように説明し、鳳に比定される女主武則天は陰ではなく陽であり、五行相生説から見て土徳の唐は火徳の周に従うべきであり、子が母に従うのは孝の観点から当然であるという儒教教理をも持ち出して、則天の即位を合理化するわけである。「臣は草鄙の愚陋、休明に生長し、親しく聖人に逢ひ、又昌運を觀る。河洛の図は、悉皆く目見す。幸ひ亦た多し」（「上大周受命頌表」）という彼の言葉には、自己を「草莽」から抜き出してくれた武則天への深い謝意と期待とがこめられている。自己の「感激」の主である武則天

の即位は、自己の新しい飛躍の大きなステップであると彼は信じ、渾身の賞讃を彼は武則天に捧げたのである。

彼は武則天の即位を「革命」と言う。易姓の政權交代であるから、それは当然のことである。しかし、彼にとつての革命は、前王朝を否定し去った上に成立するものではなかった。彼の周王朝は唐との連続の上にこそ成り立ち得るものなのであった。彼は「上大周受命頌表」で、「唐基を光有して、以て周室を啓く。旧物を改めずして、天下惟れ新たなるは、皇王ありてより以来、未だ嘗て見ざるなり」と言い、「大周受命頌序」では、「其の上を原ぬるや、緬なるかな有唐、天命を欽崇し、三祖（高祖・太宗・高宗）統を継ぎ、……、以て我が皇に授く」と述べ、「大周受命頌」では、「惟れ我が有周、実に天徳を保つ。上帝臨み命じ、唐極を纂承せしむ。皇有り女希、天に造り極に立つ」と詠じる。唐という基礎の上に燦然と輝く王朝、それが陳子昂のイメージする王朝なのであった。太宗の貞観時代を太平の世の典型と評価し、それが太宗と群臣との強い絆によって実現したと認識し、自ら魏徴たらんと欲する意気に燃える陳子昂にとつて、武周新政權は唐と断絶するものであつてはならなかつたのである。自己が理想とする「安人」の世を実現する可能性を秘めた強力な新政權の誕生は、彼

にとつては活躍の場を保証されたと自覚できるものであった。科試により官界に入った者たちが目指したものは、窮極的には宰相の地位に登り、太平の世を築くことだったはずである。その栄達の途の確保のために、彼は全霊を込めて武則天の受禪を讃え、武氏に連なる有力者たちのために文章の能力を發揮したのである。

五

陳子昂は後世の歴史家から、唐王朝を篡奪した武則天に阿附した人物として酷評されている。しかし、武周革命に至る流れの中で、武則天に対して阿諛の言辭を捧げた文人はひとり陳子昂のみではない。例えば、「代百寮請立周七廟表」「為百寮賀日抱戴慶雲表」「為百寮賀慶雲表」「為百寮賀瑞石表」「賀天尊瑞石及雨表」「大周降禪碑」などを著わした李嶠。また、「代宰相上尊号表」「代皇太子賀天后芝草表」「為涇州李使君賀慶山表」「為百官賀千葉瑞蓮表」「代百官賀明堂成上礼表」などを残す崔融。李嶠も崔融も、高宗朝に科挙に及第したものの下級官に留められていたが、武則天にその文才を認められて制誥の事を知するに至った。彼らは新興官僚層の栄達の旗手だったのであり、彼らは新時代にこそ自分たちの活躍の場が確保されることを

予知し、新時代への流れを加速させたのである。陳子昂も武則天に見出され、感激の機会によって新時代の到来を強く予感した一人であった。新時代の行く先には、官人としての使命感に燃える自己の栄達の姿がくつきりと投影されていたと考えられるのである。

自前の政権の確立のために旧勢力の手垢のついていない人材を求める武則天と、中央政界の中樞に足懸りを求める新興官僚層の思惑とが一致し、武則天を頂点とする新王朝の創立へと時代は急転回した。新興官僚層は、儒教理念を体して科試を突破し、官界に足を踏み入れて来たはずである。則天の王朝を讃美する彼らは、「牝鷄司晨」を忌む儒教の教理をあっさりとは無視してしまつたのであり、とりわけ陳子昂は「大周受命頌」などにおいて、女主登極の合理化まで行なつたことは、すでに前章で述べた。武則天の登極を促し讃美した者たちへの後世の歴史家の批判は、まさに儒教リゴリズムの立場からなされているわけである。

ただ、「牝鷄司晨」の禁忌を、新興官僚層がたやすく放棄してしまつたのは、権力に従順で大勢に流されやすい官僚の本性によるのか、彼らが自身を政治の表舞台に立たせるための打算であつたのか、あるいは、儒教の根本理念たる「平天下」の実現のために女主登極に目をつぶつたのか、

さまざまな見方が可能であろう。これらの要素は複雑に絡み合っているであろうし、また、個人的な事情にも関係するだろう。しかし、これは、ようやく定着した科挙によって登用された、門地を持たない新興官僚階層が初めて見せた側面であったことは言を俟たない。彼らが混乱の時代に見せたこの性向は、唐代中・後期の動乱や節度使の専横などのような、異常な政治状況における彼らの行動につながる可能性があり、改めて検討しなければならない事柄である。

さて、武則天の登極を促し称えた文人、およびその文章は、当時おびただしい数にのぼったはずである。しかし、その文章は陳子昂の文集に最も多く収められ、また、李嶠や崔融などに多少のものが残るほかは、ほとんどまとまった形では現存しない。それらは武周政権が崩壊し、中宗・睿宗の短期不安定政権を経たのち、唐が混乱を脱して安定の度を強めて行く中で、好ましからざる悪夢の遺物として処分されたり、文学的価値の低さから自然に淘汰されて行ったのである。ひとり陳子昂の文章が大量に保存され、しかもそれは、儒教精神に立脚する正統的主張を「女主」に対して奉るといふ構図を持つだけに、歴史家としては看過できない事柄なのであり、かくて陳子昂がこの時代の文

人の全責任を被る形で、武則天に阿附したと指弾されるのである。

陳子昂の文章の散佚を防いだのは親友の盧藏用であるが、陳子昂の没後、「其の文章は散落し、多くこれを人の口に得たり、今、存する所の者は十卷」（盧藏用「陳氏別伝」）という彼の文集はいづ編纂されたのか。「陳氏別伝」では、陳子昂が高宗の靈駕の西帰に反対する上書を呈したという件りに、「時に皇上 太后を以て撰に居り、其の書を覽てこれを壯とす」と記している。「皇上が太后として摂政の位に居た時」に陳子昂が「諫靈駕入京書」を奉ったというのであるが、「皇上」とはふつう今の皇帝を指す言い方であるから、盧藏用が陳子昂の文章を収集し、「陳氏別伝」を書いたのは、久視元年（七〇〇）の陳子昂の没後ほどないころから、武則天が退位する神龍元年（七〇五）一月までの間だったと思われる。ただ、この別伝には、陳子昂が武則天に対して「受命頌」を奉った事柄は全く記されていない。武則天の退位後、復辟した中宗に仕える盧藏用が後に記述を改めたことも考えられるが、それが事実としても、「皇上」という言葉はそのまま残ったのであろう。いずれにしても盧藏用が初めて陳子昂の文集を編み、「陳氏別伝」を書いたのは武則天の在世中だったわけで、なればこそ、

武周政権への熱い思い入れを含む文章が大量に保存されたのである。

陳子昂は唐王朝を否定しない。その唐朝の基盤の上に周王朝が屹立し、燦然たる未来を開拓すると彼は信じた。彼は新興の官人としての鋭敏な現実感覚をもって、太平の世を招来するための献策を行ない、それによって自己の栄達の道を切り開こうとした。権力に阿附しようとするのであれば、彼は盧藏用のように「隨駕隱士」として形勢を窺望したり、宋之問のように権幸への媚諛に徹して出世をはかることもできたはずであった。しかし彼は、聖曆元年（六九八）、最後の上書たる「上益国事」「上蜀川安危事三条」「復讎議状」を残して武則天の朝を去った。周王朝が崩壊する五年前である。そして、彼は退隱後も「魏闕」に対する関心を抱き続けた。彼は官人としての態度を終生保持したのであった。

おわりに

「僕嘗て窃かに自ら量らずして、謂ひ以為へらく、得失は人に在りと。聞見を掲げて当代の士に抗衡はんと欲するも、知らず、事に大いに此の望みに謬異ふ者あらんとは」（与韋五虚已書）は、最後の帰郷に際して陳子昂が韋

虚己に漏らした述懐である。政治の成功と失敗は人材しいであるとの認識に立つ彼は、われこそが天下に太平をもたらす者であるという強烈な自負心を抱いて官僚社会に身を投じ、みずからの「聞見」を抛りどころに当時の人士と張り合つたのである。しかし、彼の悲願は終に実現することなく、彼は無念の思いとともに帰郷する。孤立無援の戦いの証たる彼の上書は、盧藏用が「陳氏別伝」で「其の立言措意は、王霸の大略に在るのみ」と述べるように、経国の根幹に関わるものであった。陳子昂の政治的言論と政治的行動との乖離を指弾する『新唐書』が、本伝ならびに孝友伝に陳子昂の文章を七篇収録し、しかも『旧唐書』と異なつて「文苑」の外に立伝したのは、陳子昂が単なる文人ではなく、また、彼の言論がいかに政治の本道を歩むものであったかを逆に証明するであろう。初唐の文人で、陳子昂ほど大胆に政治に対する発言を続けた者はいない。彼は第一に官人であり、その後に詩人だったのである。

盧藏用のお蔭で今に残る『陳子昂文集』には、陳子昂の官人としての情熱のほとばしりと、詩人としての絶望のうめきとがないまぜになつて存在している。晩唐の劉蛻には「覽陳拾遺文集」と題する詩があり、そこでは「意気高於頭、冰霜冷人腹」（意気頭に高く、冰霜人の腹を冷えしむ）

とうたわれる。陳子昂の文集をしかと読み抜いた後の印象を語ったものである。

注

(1) 罗时进「对陈子昂研究中几个基本问题的再认识」(《唐代文学研究》第一輯、中国唐代文学会・西北大学中文系、山西人民出版社、一九八八年三月)

(2) この指摘は、例えば韓理洲『陈子昂研究』(上海古籍出版社、一九八八年十二月)の「生平 and 思想」という章などに示されている。

(3) 「答制問事八条」は、「臣今月十九日、蒙恩勅召見、令臣論當今政要、行何道可以適時、不須遠引上古、具牀進者。」と書き出される。また、『新唐書』本伝ではこの件りに関して、「后復召見、使論爲政之要、適時不使者、毋援上古、角空言。」と記している。

(4) 『貞觀政要』(上海古籍出版社、一九八七年九月)の「出版説明」による。

(5) 二詩の繫年は彭庆生『陈子昂诗注』(四川人民出版社、一九八一年二月)による。なお、宴主である高正臣は、陳子昂「諫刑書」の中に、「武則天が李珍らの無罪を察し、魏元忠の功を明らかにし、高正臣を召見し、元万頃を推したので、百寮は慶賀した」という文脈で登場する。また、陳嘉言は、陳子昂が「申宗人冤獄書」でその無罪を訴えた人物である。

(6) 例えば、陳子昂「感遇」其十六、「薊丘覽古贈盧居士藏用」

詩などにうかがわれる。後者では「義」が強調されるが、「義」も「感激」も、人と人とを強固に結ぶ要素としては本質的に変わりがない。

(7) 例えば、「故宣議郎騎都尉行曹州離狐縣丞高府君墓誌銘」「周故内供奉學士懷州河内縣尉陳石碩人墓誌銘」など。ただ、「大周革命」という言い方は陳子昂特有のものではなく、当時普通に用いられた。

(8) 『陳子昂集』(徐鵬校、中華書局、一九六〇年三月)には、卷三・四にわたり「為建安王破賊表」「為豊国夫人慶皇太子誕表」「為河内王論軍功表」など、三十篇を越える上表が収められている。

(9) 例えば、『新唐書』本伝論贊では、「子昂說武后興明堂・太學、其言甚高、殊可怪笑。后竊威柄、誅大臣・宗室、脅逼長君而奪之權、子昂乃以王者之術勉之。卒爲婦人訕侮不用。可謂薦圭璧於房闈、以脂澤汗漫之也。賢者不見泰山、聾者不聞雷霆、子昂之于言、其聾賢歟。」と評している。

(10) 李嶠・崔融に関しては、彼らの伝は『旧唐書』卷九四に蘇味道・盧藏用・徐彦伯とともに収められており、その論贊では、「人の才は智から出て、行ないは性から出る。故に文章の巧拙は智の深淺に由り、行義の邪正は性の善惡に由る」という前提に立って、李嶠・崔融らは文章においては優れているが、「輔弼」の面からすれば「貞純」でなかったと評している。陳子昂に対する『新唐書』の論評と同軌のものである。

〔付記〕 左記の研究書には特に裨益されるところが多かった。

韩理洲『陈子昂评传』（西北大学出版社、一九八七年九月）

韩理洲『陈子昂研究』（上海古籍出版社、一九八八年十二月）

『陈子昂研究论集』（四川射洪县陈子昂研究聯絡組等編、中国文

聯出版公司、一九八九年十二月）

（北海道教育大学）